

「富山県こどもの権利に関する条例」(仮称) 制定に関する有識者会議(第4回) 議事要旨

日 時：令和7年10月31日(金) 午前10時00分～午前11時30分

場 所：県民会館702号室

出席者：村上座長、高和委員、牟田委員、本田委員、板鼻委員、小島委員、蓑口委員、平岡委員

欠 席：田村委員、杉山委員

委員の発言要旨

事務局より「こども等からの意見の聴取状況」(資料1)等について説明ののち、委員から次のとおり発言があった。

【条例案に対するこどもの意見聴取について】

- ワークショップの結果について、こどもに関わる大人がこどもの権利のことを考えて、適切に対応する必要があると感じた。また、今回の資料にあるワークショップのような取り組みを継続的に実施する必要があると感じた。
- 前回のこどもの意見の資料に「こども基本法を丸写しするのでは新しく条例を作る意味がない。こどもの健やかな成長を支える者は、注意深く見守るだけでいいのか。権利侵害について他にもやるべきことがあるのではないか。」という意見があった。小学校時代にいじめにあい、不登校になり、傷ついた青年たちは、社会から忘れられているのではないかと感じている。そうした人たちに応え、愛情が感じられる条例にする必要がある。
- 先日、全国で不登校のこどもが35万人いるという文科省の調査結果が出たが、各種調査によるとその3倍のこどもたちが学校に行きたくないと思っているという話がある。彼らは自分の思いを表明できないまま学校に行っている。資料に記載されている意見以外にも多様な意見があるという前提で条例の内容を検討すべき。
- こども自身に、こどもの権利や条例に関心を持ってもらうためには、保育園や学童での読み聞かせや寸劇など、いろいろな工夫がある。条例を作っただけで終わりにせず、広報してほしい。
- 「こどもまんなかアクション」リレーシンポジウム in 富山に参加した。たくさんのこども・保護者が集まっており、ワークショップの中でこどもたちの具体的な意見がたくさん出た。条例を作ろうとしているからこそ、こうした意見表明の機会があり、条例ができた後も様々な場所で話し合いの場ができることを期待したい。
- こどもにはいろいろな社会関係の中で自分を見出していける場が必要。この条例が効力を発揮できる場が今後どれだけあるのかが大切。
- 年齢にかかわらず、意見を否定しないでほしい、自分自身で決めさせてほしいというこ

どもの意見がたくさん見られたが、こどもの意見を尊重するためには、大人が条例の趣旨を理解する必要がある。

- 資料によるとこどもから大人への配慮を求める意見が多かったので、そのことを大人に知ってもらわないといけない。こどもだけでなく、大人にも知ってもらえる施策が大事。
- 意見を表明しやすい環境づくりについて、多くのこどもは、どんなことを相談したらいいのかも分かっていないのではないかと。直接大人に言ったり、紙に書いたりといった相談できる媒体の多様化と合わせて、どんなことを相談できるのかということが明確化されると、こどもにとって相談しやすくなるのではないかと思う。

【条例素案について】

- こども支援委員会について、こども総合サポートプラザとの役割分担の趣旨は理解できるが、相談しないと支援委員会に申立てができないと言われて、こどもが支援委員会への申立てをあきらめることがないようにしなければならない。また、こども総合サポートプラザで相談後のフォローアップを行う必要がある。相談で対応できなかった案件をこども支援委員会につなげるためにも重要。
- こども支援委員会には、こどもの言葉を通訳し、こどもが言いたいことを言えるようにする機能が必要。申立て後の調整の経過やその結果をこどもに説明する機能もこども支援委員会は持つべき。
- この条例をきっかけに、今のこどもたちだけでなく、過去、不登校だったこどもたちに対しても温かい愛情で語り掛け、謙虚に寄り添うべき。
- これからこどもの権利擁護に真摯に取り組むことの決意の表れとして条例を制定するという意思をはっきりとさせなければならない。そうでないと、単に条例ができただけで、誰も受け止めない。これまでこどもの権利擁護に十分取り組んでこなかった真摯な反省も大事。
- こども期にトラウマを抱えたら成人期まで影響する。たくさんの不登校を経験した若者が、不登校になったため人生が終わりだと感じて不安を抱えている。また、小中学生時代のいじめなどが原因で30歳を過ぎても孤独・孤立を感じている者もいる。いじめが原因で大人になってもトラウマになっている若者に対しても温かいまなざしを向けてほしい。権利侵害から守る環境を整え、安心して過ごせる社会を実現することを約束するというような文言を入れてほしい。
- こども支援委員会の対応はスピード感が必要。例えば四半期が過ぎればこどもにとっては学期が変わり、1つの区切りと言える。こども総合サポートプラザから情報提供してもらいながらスピード感をもって対応してほしい。
- 素案第4条第1項第5号の「将来を自ら選択できる権利」を具体的に理解できるよう、その考え方に高校ワークショップでの「正しい知識を得て、そのうえで、自分で将来を選択したい」という意見も追記すべき。

【総括】

- こども家庭庁が令和5年度に「こどもまんなか社会」への実現に向かっているかという全国調査をしたところ、15.4%ほどしか向かっていると感じていないということだった。「こどもまんなか」や「こどもの条例」という言葉が会話にホットワードとして出てくるような、熱い富山県になっていかなければいけないと思う。そのためには、まず大人がこどもまんなか社会について理解していなければいけない。大人が理解できるように、ワークショップに限らず、地域の様々な会合等の中で少しでも話題に出していただく必要がある。
- こどものころに傷ついて大人になってもそれを引きずることがないようにしないといけない。

以 上